



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
（株）武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体 3,000 円 + 税です。

合気語録

負けない境地

スポーツ格闘技や競技武道の選手や愛好者は、もともと「勝つため」を目的に日夜練習をするものである。相手に打たれたり、投げられたりしては上手といえず、あくまでも「勝ち」を求めて練習をするものである。しかし武術は勝つためより、「負けない境地」を得るために修練するのであって、そこには容易に敵から攻め込まれない「位」(敵に対して優位な体勢を得ること)を会得するために、日夜稽古を重ねることを本義としている。人間の行動原理、最も大切な行動規範 (norm) / 人々の日々の行動を秩序づける価値観) は、実はここに置かれ、「負けない境地」への探究が武術の真の目的なのである。この点も、武術がスポーツ格闘技や競技武道と、種を異にして異なるのである。

スポーツ格闘技や競技武道では、何が何でも勝たなければならぬし、また勝たなければ英雄の座にもありつけない。ところが武術は、最初から勝つことを目的として修練するのでないから、そこに置かれる次元は「負けない境地」への探究が、第一の目的となる。では、負けない境地とは何か。例えば、応接間で二人が対峙したとしよう。その時、相手の執れか、口論の末で暴力に及び、攻撃に出たとしよう。この暴力に対して、攻撃を受けた方はどうするか。ここに、対処する武術修行者の姿勢が隠されているのである。

しかし現代社会において、こうした行為が法的に正統防衛になるか、否かは、非常に難しいことなので、咄嗟の場合、臨機応変に身の周りの道具を臨事仕立ての武器にして戦う術を知っているというだけで、有効な「切り札」を持っていることになる。それは違わなくても、有事になれば「知っている」と言っ、相手より一等高い境地である。それは、実際に違わなくても、それを知っているという心の余裕が、相手とは一ラック違う優越感を抱くことになり、また最後の最後まで追い詰められれば、これを遣うかも知れないという恐れを、相手に恐怖を抱かせることができる。つまり「窮鼠猫を噛む」状態に追い込めば、幾ら腕力が優つていても、「お前も、決して無傷では済まないぞ」という威圧を与え、その術を知っていることが、秘伝で言う「切り札」なのだ。

これは一種の核爆弾にも匹敵しよう。核は実際には、実用的な兵器ではない。しかし核を所有することで、敵対国や仮想敵国に恐れを抱かせ、戦争を抑止する効果が充分に果たされている。「切り札」とはそうしたものであり、危険すぎて実用的でないからこそ、その威圧は充分に効果を発揮するのである。ここに、「切り札」の「切り札」たる所以がある。

西郷派大東流合気武術における拳法とは、その当身術や点穴術の総てが、ケンカ道具として、日常生活の中では余りにも危険すぎて、決して実用的とは言えないところがある。また、口ブの張ったリングの中で、試合のルールに則って格闘し、拳の打ち合いや、足蹴りの応酬で、対戦者をリングに沈めるものでない。試合馴れた訓練はしないのである。

しかし、一度非日常と周囲が変化した場合、恐れるべき威力を発揮するのが西郷派大東流合気武術だ。またこれが、巷間に流布する格闘技と全く違う戦術思想を撃つて、最も危険な「切り札」として、日常では遣えないが、非日常に至った場合に有効な手段となる要素を持っているのである。

大東流にも槍術において、騎馬侍と徒侍の一騎討ちを想定して、これは「騎馬侍対徒侍」の関係で、こうした形の攻防は存在している。この攻防は、人類が戦いをはじめた古来より存在する。さて徒侍とは、歩兵の意味で、家録が十人扶持以下の下級武士である。普段は騎乗が許されず、徒歩戦において白兵戦になった場合に配備された特異な槍術あるいは抜刀集団である。この集団は、戦いが最初には飛道具の弓矢や鉄砲が打ち込まれた後、長槍の雑兵同士の槍術戦が行われ、次に騎馬武者の突撃が行われ、こうした展開後、白兵戦となり、騎馬侍対徒侍の

合気戦闘理論 その11

兵站部の重要性を無視した日本軍同時に、軍隊には陸海軍司法権までも持った警察機構までが存在し、陸海軍の憲兵や警務隊が、軍隊内の犯罪捜査を担当した。兵站部を確保して、軍事物資を運ぶのは輜重兵があり、輸送手段を持っていて、軍車輛や航空機を飛ばすにも、専門の操縦者がいたし、その整備は整備兵が当たった。金銭の出入りや、物資の購入には、専門の陸海軍の経理学校を卒業した主計将校があり、機械類を動かすには機関学校出身の機関将校はこれに当たり、機関兵がその手足となっていた。

また、小銃、野砲(機動性のある軽小銃)等の武器・弾薬、戦車や装甲車、軍用機や軍艦の設計には、技術将校が造兵廠や兵器本廠や海軍工廠などで、それにあたった。こうした組織は、人類が軍隊という組織を形成した時に、既に始まっていた。アレキサンダー大王や、ローマ皇帝カエサルの大軍にも、漢帝国や唐帝国の大軍も、あるいは中世の十字軍も、こうした自己完結性を持っていったのである。

つまり軍隊とは、自前で何でも出来るオールマイティー組織であり、軍隊と警察の大きな違いは、ここにあるのである。こうして考えると、江戸の徳川封建時代は、まさに自己完結性の欠けた、登城出勤集団の群れが武士階級であり、どうみても、これは軍

隊というべきものではなかった。今日で言う「禄(扶持米)」を貰うサラリーマンに過ぎないのである。この時代の武士は、軍事思想と戦争観の希薄な階級となっていた。そして当時の日本人の、約七割が武士階級であり、約二百五十年間も非武装社会を形成した。

こうした伝統において幕末の動乱を迎え、明治維新を起して、近代に突入するのであるから、軍事的発想を無くしてしまつた者が、「尚武の民」とは言い難く、この後遺症は、太平洋戦争敗北で、大きな傷痕を残す。

そして日本人は、「根本的な日本の弱さ」を見透かされて、以降、欧米追従の政策をとり、丸腰外交を展開し、外交交渉においては、外国から金品だけを齎し取られ、弱さの幻想の中に埋もれる民族と成り下がったのである。

尚武の希薄な民族・日本人 江戸期、徳川幕府は約二万五千名の旗本や御家人を抱えていた。これに諸藩の武士を併せると、およそ十万人程度であろう。つまり日本人の約7割程度が、武士は居なかつたことになる。

幕末期の黒船砲艦外交の時、十万人もの武士が居ながら、僅か30人のペリー艦隊に「降参」してしまうのであるから情けない話であり、これは世界軍隊史上、ワースト・ツーに挙げられるもので、まさに「その弱

は氣勢が漏れているので、思つたより威力的でなく、氣勢が対象物の媒体に負けた場合、一気に腰砕けとなる。しかしこの腰砕け状態を度外視して、吐く方が気合いが入り、氣勢によって的を殲滅させる事が出来ると信じられている。

氣勢で敵を殲滅できる場合は、敵は大声に驚き、心理的に動揺した時だけであり、一旦大声になれてしまえば、同じ手は二度と喰わないのである。したがって古来の秘伝によれば、氣勢は内なるところに秘めるもので、外には出さないものとされている。この呼吸が、出る際の陽の行動の裡側として、陰陽相反する「吸う呼吸」である。

長州藩以外の日本人は、「黒船」と聞くと、まるで今日の日本人が、「癌イコール死」と結び付けて恐れているように、黒船の所有する大砲を、原爆並みに恐れていたのである。したがって時代に慣らされ、非武装に慣らされた平和ボケの幕府の役人どもは、自らの弱さや、日本人の戦意の無さを無意識に感じ取り、競って防壁の門扉を開き、「開国」に廻つたというのが実情であろう。こうした中に、当時の武士階級には、武士道など微塵もなかつたと言つてよい。そして武士道不在の実情は、やがて尊王攘夷を主張していた佐幕派にも拡大され、彼等も討幕後の、政権取得に近づくと、非武装国家・日本が、この場に及んで、慌てて軍備を施しても攘夷が不可能であると悟るのである。

つまりこの時期に至って、武士階級の一部から、これまで表面上の武士道を豪語してきたが、これは虚偽感しと気付き、素直に日本人の弱さを認め、開国し、文明開化に至るといふ、いわば宗旨替えを公然と行つたのである。

当時の武士階級は、「ものふ」という、表面上の威勢だけはよかつたが、もう一方で、「ものふ」としての戦士、あるいは軍隊という基本概念すら理解していなかつたのである。その為に、簡単に列強に屈してしまう、インカ帝国の守備兵こときの、戦意の無さ、弱さがあつたのである。

本来ならば、装備や武器や戦術に大きな差があつても、真の戦意があれば、簡単には負けないものである。

指導内容： 合気揚げを中心にした力貫・合気初伝から奥伝・合気柔術合気行法・野営実践稽古・野営における食養野草の智慧・靈的食養道など

詳しくはホームページで：
<http://www.daitouryu.com/>



関西近畿宗家直伝講習会

講習会日時：3月21日(日)午後一時～午後三時
於て：滋賀県立武道館(JR 大津駅または JR 膳所駅下車)

お問い合わせ Eメール：saigo@skyblue.ocn.ne.jp
お問合せ：〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
総本部 尚道館 093(962)7710代表